

ヒトパピローマウイルス感染症予防接種について

ヒトパピローマウイルスワクチン(HPV ワクチン、子宮頸がん予防ワクチン)は、平成25年4月より定期接種となりましたが、ワクチンとの因果関係が否定できない持続的な疼痛が HPV ワクチン接種後に特異的に見られたことから、同年6月に積極的な勧奨(個別に接種を勧める通知を送るなど)が中止されました。その後も厚生労働省で継続して審議され、接種による有効性が副反応のリスクを上回ると認められ、令和4年4月から個別に通知することが再開されました。また、令和5年4月1日より9価ワクチンが定期予防接種に加わりました。

●ヒトパピローマウイルスについて

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、皮ふや粘膜に感染するウイルスで、200以上の種類があります。粘膜に感染する HPV のうち少なくとも15種類が子宮頸がんの患者さんから検出され、「高リスク型 HPV」と呼ばれています。

これら高リスク型 HPV は性行為によって感染しますが、子宮頸がん以外に、中咽頭がん、肛門がん、膣がん、外陰がん、陰茎がんなどにも関わっていると考えられます。

対象者： H9.4.2生まれ～H25.4.1生まれの女性 ※沖縄市に住民登録をしている方



沖縄市 HPV ページ



厚生労働省 HPV ページ

●HPV ワクチンの種類について

定期予防接種として使用されている HPV ワクチンは3種類(2価・4価・9価)あり、予防できる HPV の型に違いがあります。

受ける際には、**原則、同じ種類のワクチンを合計2回または3回接種します。**

※途中でワクチンの種類を変更することはお勧めしていません。

●ワクチンで予防できる HPV の型と接種間隔、回数

現在日本において公費で受けられる HPV ワクチンは、防ぐことができる HPV の種類(型)によって、2価ワクチン(サーバリックス)、4価ワクチン(ガーダシル)、9価ワクチン(シルガード9)の3種類あります。一定の間隔をあけて、同じワクチンを合計2回または3回接種します。接種するワクチン年齢によって、接種のタイミングや回数が異なります。どのワクチンを接種するかは、接種する医療機関に相談してください。

*2023年4月からシルガード9も公費で接種できるようになりました。

【標準的なワクチン接種スケジュール】



3種類とも1年以内に接種を終えることが望ましい。

※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2・3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※2)、3回目は2回目から3か月以上(※3)あけます。

※4・5 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の1か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※4)、3回目は1回目から5か月以上、2回目から2か月半以上(※5)あけます。

●子宮頸がんについて

子宮頸がんは、子宮の出口付近の「子宮頸部(けいぶ)」にできるがんのことで、子宮頸がんのほとんどが、HPV に感染することで発生します。HPV に感染しても、すぐにかんにかかるわけではなく、いくつかの段階があります。

子宮頸部の細胞に HPV が感染しても、ほとんどは自然に消えますが、一部の人で HPV がなくなり、ずっと感染した状態が続き、数年～十数年かけてがんとなります。HPV 感染は主に性的接触によって起こります。

HPV ワクチンは、全ての HPV の感染を防ぐものではありません。また、接種前に既に感染している HPV を排除したり、子宮頸部の前がん病変やがん細胞を治したりする効果はありません。

子宮頸がんを早期発見・早期治療するために、**20歳を過ぎたら定期的(2年に1回)に子宮頸がん検診を受けましょう。**

●HPV ワクチンの効果について

2価、4価 HPV ワクチンは、子宮頸がんをおこしやすい HPV16 型と HPV18 型の感染を防ぐことができます。子宮頸がんの原因の 50～70% は HPV16 型と HPV18 型が原因といわれています。また、9価ワクチンは、HPV16 型と HPV18 型に加えて、他の5種類の型にも効果があるため、80～90%の効果があるとされています。

●ワクチンの副反応について

接種部位の症状(痛み・赤み・はれ・しこり・かゆみなど)、疲労、筋痛、頭痛、めまい、下痢、腹痛など、関節痛、発疹、発熱などが報告されています。まれに重い副反応として、ショック又はアナフィラキシーを含むアレルギー反応(じんましん、呼吸困難、血管浮腫など)、ギラン・バレー症候群、血小板減少性紫斑病、急性散在性脳脊髄炎が現れることがあります。このような症状が疑われた場合は、すぐに医師に相談してください。

その他、ワクチン接種後に、注射による恐怖・痛みなどが原因で血管迷走神経反射による失神をおこすことがあります。失神による転倒を避けるために、接種後の移動の際には、保護者又は医療従事者が腕を持つなどして付き添うようにし、接種後 30 分程度は体重を預けられるような場所で座らせた状態でお客様の様子を観察しましょう。

また、HPV ワクチン接種後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動等を中心とする「多様な症状」が起きたことが副反応疑い報告により報告されています。症状としては「頭や腰、関節等の痛み、感覚が鈍い、しびれる、光に関する過敏、脱力、歩行困難、不随意運動、倦怠感、めまい、睡眠障害、月経異常、記憶障害、学習意欲の低下、計算障害、集中力の低下等」様々な症状が報告されています。このような「多様な症状」の報告を受け、様々な調査研究が行われていますが、ワクチン接種と因果関係は証明されていません。接種後に、このような症状が出た場合は接種医またはかかりつけ医にご相談ください。

○予防接種による健康被害救済制度について

定期予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が予防接種によるものと国が認定した場合は、予防接種法に基づく補償を受けることができます。

沖縄市役所 こども相談・健康課 予防係 098-939-1212(内線 2232・2233) ※令和6年4月現在の情報です。